

〈生活〉

自ら働きかける力を育む生活科の授業の工夫

— カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導を通して
(第 1 学年) —

石垣市立宮良小学校教諭 加 原 玲 子

I テーマ設定の理由

現代は、生産年齢人口の減少による少子高齢化やグローバル化の進展、技術革新、人口知能（AI）の飛躍的な進化により、社会構造が急速に変化し予測困難な時代となっている。このような時代にあつて学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにする事が求められている。これは、生活科の教科目標にもつながるものである。

「小学校学習指導要領解説生活編（平成 29 年告示）」（以下「解説生活編」と略す）において、「学びに向かう力、人間性等」は、「思いや願いの実現に向けて、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信を持って学んだり生活を豊かにしたりしようとすることを繰り返し、それが安定的に行われるような態度を養うことを目指している」と示されている。さらに、生活科においては、各教科等の関連を積極的に図り、幼児期における遊びを通した総合的な学びからより自覚的な学びに円滑に移行できるよう合科的・関連的な指導が求められる。

これまでの生活科における実践において、児童の興味・関心を引き出すような身近な教材の活用や単元の導入の工夫、五感を通して感じたことを表現しやすいようなワークシートの作成に取り組んできた。しかし、教師の準備過多から児童の自己選択・自己決定の場と指導すべき事が明確に分けられず、児童にとって受動的な活動になっていた事が課題としてあげられる。また、生活科で学習した事が言葉や絵等、多様な方法で表現したくなる気持ちにつながったり、他の教科で身につけた資質・能力が生活科の学習の中で発揮されたりすることを意識した計画・実践には至らなかった。そのため活動が友達との関わりや主体性の弱い自分自身のみの活動になり、児童の思いや願いが不明確で、楽しさや満足感・達成感を味わえるような授業作りが十分でなかったといえる。一人ひとりの学びは個別の教科内で閉じるものではなく、それぞれの学びが相互に関連し、つながりあっている。生活科と他教科等において学んだことがどのように関連付いていくのかを意識し、児童の思いや願いを生かした学習活動を展開することが重要である。単に題材や活動を関連付けるだけでなく、それぞれの教科でどのような資質・能力を育成したいのかを意識し、関連教科と生活科の目標が共に実現されるカリキュラム・マネジメントが必要であると考えた。

そこで、本研究では、生活科の学習内容「身近な人々、社会及び自然と関わる活動」において、生活科を軸として国語・算数・図工・音楽・道徳科と関連を持たせた単元配列表を作成し、学びのつながりを意識した学習活動を計画する。さらに、「算数」で数の学習を終えた後に「生活科」で花や葉の数を数える等、指導の時期や方法等についても相互の関連を考慮したカリキュラム・マネジメントを通して「自ら働きかける力」が育まれるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「はなややさいとなかよし」の小単位において、カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導を通した単元配列表を作成し、学びのつながりを可視化することで自ら学ぶ楽しさ、満足感、達成感を味わうことができ、「自ら働きかける力」が育まれるだろう。

II 研究内容

1 自ら働きかける力について

「解説生活編」において、育成を目指す資質・能力における「学びに向かう力、人間性」としての「自ら働きかける力」とは、「児童が思いや願いに基づいて、身近な人々、社会及び自然に、自分から接近し何らかの行為を行う事」と示されている。そのときのドキドキした気持ちやワクワクした気持ち、満足感や達成感などのやり遂げたという気持ちを強く味わう事が意欲や自信となり、自らの学びを次の活動やこれからの生活に生かしたり、新たなことに挑戦したりしようとする「自ら働きかける力」を生み出していくと考える（図1）。



図1 「自ら働きかける力」のイメージ図

本実践「飼育・栽培の過程」での「自ら働きかける」とは、「もっと元気に育ってほしい」「もっと上手に育てたい」という自分の願いを実現するために、児童が意図をもって行動する事と捉える。はじめは自分本位で植物と関わっていた児童も、繰り返し関わる事で心を寄せ、生命の尊さを感じ、世話を続ける事で得られた手応えや自信が、新たな活動に挑戦していこうとする姿や生活を豊かにしていく思いにつながる。育ててみたい植物を自分で選び（自己選択）、よく育つのはどこかを考えて植木鉢を置く場所を自分で決める（自己決定）等、児童主体の活動を大切に、教師の適切な関与を意識した活動を実践する。

2 カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導について

(1) カリキュラム・マネジメントとは

「解説生活編」において、カリキュラム・マネジメントとは、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等横断的な視点で組み立てていく事、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく事などを通して、教育過程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の資質の向上を図っていく事」と示している。

カリキュラム・マネジメントには、教科等横断的な視点での教育内容配列の側面、PDCAサイクルの側面、学校内外資源の活用の側面の3つの側面がある（図2）。その中でも田村学（2017）は、特に教科等横断的な視点での教育内容配列の側面が重要だと述べている。なぜなら、社会で活用できる・求められる「資質・能力」を育成していくためには、各教科等の「育成を目指す資質・能力」と学習活動を関連づけ、学びを教科等別にとどめるのではなく教育課程全体を視野に入れた「教科等横断的な学習」を実現する事が大切だと言えるからである。教科等横断的な視点での教育内容配列には、全体計画の作成、単元配列表の作成、単元計画の作成の3つの階層がある。

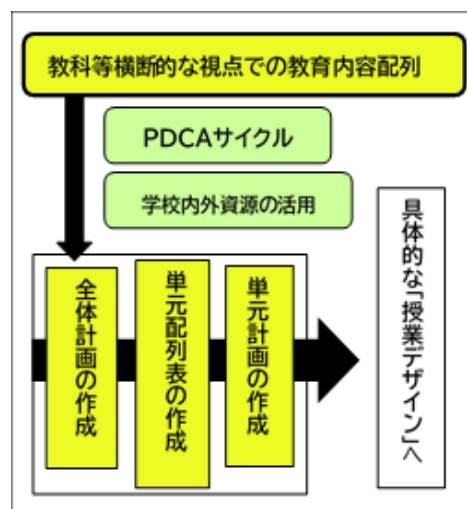


図2 カリキュラム・マネジメントの構想図
（田村学（2017）を参考に作成）

(2) 合科的・関連的な指導とは

「解説生活編」において、「合科的な指導とは、各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開するものである」と示されている。また、「関連的な指導とは、教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法等について相互の関連を考慮して指導するものである」と示されている。合科的・関連的な指導を展開することにより主体的な活動が実現でき、児童の思いや願いを存分に発揮しながら体験を通して学ぶ事で、中学年以降の学びを支える資質・能力を育成していく事にもつながると考える（図3）。

(3) カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導

生活科の授業づくりでは、教科等横断的な他教科との関連を図った指導の在り方として、生活科の学習成果を他教科等の学習に生かす事と、他教科等の学習成果を生活科の学習に生かす事が挙げられる。生活科と各教科等は、互いに支え合い、補い合う関係にあるといえるため、その関係性を高めるには、各教科等で身につける知識や技能等を把握し、関連を図る必要がある。そして、合科的・関連的に扱うことで、指導の効果の高まりも期待できると考える。本実践における生活科と他教科等との関連をまとめた(図4)。生活科の時間にたねまきをした様子やその時の気持ちを、国語の学習「見つけて話そう」「知らせたいことをかこう」の単元と関連させて書く等、各教科の特性を理解し関連させ、体験活動と表現活動が行きつ戻りつする相互作用を意識しながら活動を行う。そうすることで、活動を通した喜びが生まれ、それが自信・意欲となり「自ら働きかける力」が育まれていくと考える。



図3 合科的・関連的な指導を取り入れたカリキュラム・マネジメント

小单元「はなやさいとなかよし」における各教科との合科的・関連的な指導				
国 語	算 数	図 工	音 楽	道 徳
見つけた事・知らせたい事・楽しかった事を書いたり、楽しく聞いたり、思い出を話したりする	数の数え方・10 より大きい数、長さの測り方等の単元で学んだことを生活科の学習で活用する	すきなもののや、さわった感じを絵に描いて表現したり、材料・用具の使い方を学んだりした事を生かして作品を作る	嬉しい・楽しい気持ちを歌にして歌ったり、体全体で表現したり、イメージしながら音遊びをする	生命の尊さや自然のすばらしさに気付いたり、植物に優しい気持ちで接したり、美しい物に感動する心を育む
↑↓ 体験表現が ↑↓ 豊かに行き交う ↑↓ 喜び・自信・意欲				
生活科「はなやさいとなかよし」の学習活動				
たねまき・発芽・開花・小物作り・たねとりをした時の様子や気持ちを書いたり、話したりする	葉や花、たねの数を数えたり、茎やつるの長さを測ったり、比べたりする	観察した事や・成長の様子を絵に描いたり、花やつるを使ったりして作品づくりをする	発芽・開花した時の嬉しい気持ちや、作品を作った時の楽しい気持ちを表現する	発芽・開花した時の嬉しさや喜び、発芽しなかったり、葉や花が枯れたりした時の悲しさ等の体験をする

図4 本実践における各教科等との合科的・関連的な指導

3 単元配列表について

各教科等の指導計画を一体化させ、学習活動の全体を概観し、学び手である児童を中心に据えて、効率的かつ有効な学びになるように俯瞰したものが単元配列表である。生活科は、幼児期の教育とつなげ、小学校においては各教科等を横断的につなぎ、そして、3年生以降の総合的な学習の時間や理科、社会にもつながっていくという、教育課程の重要な結節点としての役割を担っている。その役割を充実・達成させるために、生活科を柱にした単元配列表の作成が求められている。作成にあたっては沖縄県立総合教育センターの「カリキュラム・マネジメントガイド(2020)」の「単元配列表の作成手順(図5)」を参考にする。その際、見通しを持った柔軟な計画になるように配慮する。また、児童自身が「学びのつながり」を意識しながら実践できるよう共に作成し、可視化を図る。

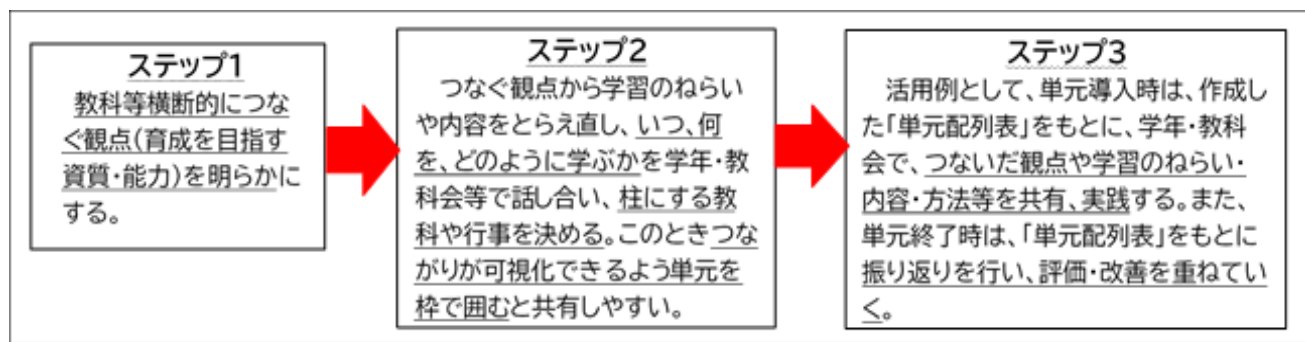


図5 単元配列表の作成手順

上記の作成手順を参考に、小単元「はなややさいとなかよし」を中核とした単元配列表を作成した(図6)。「学びに向かう力・人間性」における資質・能力と関連づけてつながりを示している。

月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
行事	始業式 入学式	我ら探検隊	交通安全教室 1学期終業式	夏休み 2学期始業式	運動会	小学校陸上大会
国語	みつけてはなそう たのしくきこう (合科的)	みんなにはなそう よくみてかこう (合科的)	しらせたいことをかこう としょかんへいこう (合科的)	えにっき (合科的・ 関連的)	なつのおもいでをは なそう (合科的)	たのしかったことを かこう (合科的)
算数	なかまづくりと かず (合科的)	あわせていくつ ふえるといくつ (関連的)	のこりはいくつ ちがいはいくつ (関連的)	どちらが ながい (関連的)		10より大きいかず どちらがおおい (合科的)
生活	みんな なかよし なにをそだてようかな はやくめをだしてね おおきなあれ		なつと なかよし はながさいたよ きれいにできたよ たねがとれたよ			あきと なかよし こんどはなにを そだてようかな
図工	すきなもののいっぱい(絵) クレヨンやバスとなかよし(絵) (合科的)		さわってかくの きもちいい(絵) (合科的・ 関連的)	ひらめきコーナー(工作)	ざらざら どうぞろ いいきもち(造形遊び) (合科的・ 関連的)	
音楽	うたっておどって なかよくなろう (関連的)	うまれたてのいのち (合科的)		みのまわりのおとに みみをすまそう (関連的)	どれみとなかよくなろう (関連的)	
道徳	たのしいがっこう (関連的)	うまれたてのいのち (合科的)	ありがとう (関連的)	あとかたづけ (関連的)		かぼちゃのつる (合科的)

※→は生活科から他教科へ(国語・音楽・道徳)、⇨は他教科(算数・図工)から生活科へを示している。
※(合科的)は生活科の学習と合科的に扱う単元や教材、(関連的)は生活科の学習と関連した単元や教材を示している。

図6 単元配列表

Ⅲ 指導の実際

- 1 大単元名「みんな なかよし」「なつと なかよし」「あきと なかよし」
- 2 小単元目標「はなややさいとなかよし」

あさがおを育てる活動を通して、あさがおの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、あさがおに合った世話の仕方があることや生命をもっていること、成長していることに気付き、あさがおへの親しみをもち、植物を大切にしようとするができるようにする。

- 3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	動植物は生命をもっていることや成長していることに気付いている。	動植物の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけている。	動植物への親しみをもち、大切にしようとしている。
小単位における評価規準	①植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に気付いている。 ②育てている植物に合った世話の仕方があることに気付いている。 ③生き物への親しみが増し、上手に世話ができるようになったことに気付いている。	①植物の特徴などを意識しながら、育ててみたい植物を選んだり決めたりしている。 ②植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に着目して、観察したり世話をしたりしている。 ③育ててきた植物のことや心を寄せて世話をしてきたことなどを振り返り、表現している。	①よりよい成長を願って、繰り返し関わろうとしている。 ②植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に応じて、世話をしようとしている。 ③生き物に親しみや愛着をもったり、自分の関わりが増したことに自信をもったりしたことを実感し、生命あるものとして関わろうとしている。

4 単元の指導計画と評価規準・評価方法

次	○主な学習活動 数字は時数	評価規準 ★重点			評価方法	・他教科との関わり(育成を目指す資質・能力との関連)	
		知	思	態			
第一次(8時間)	○育てた事がある植物について話し合い、活動への期待と見通しを持つ。 ○あさがおについて話し合う。 ①②		①★		行動観察	道徳	・「楽しい学校」の教材とあさがおのお世話をする楽しさ・楽しさ関連づけて、学習意欲を養う。 ・経験したことから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたい事を書くことができる。
	○自分のたねを決めて、くわしく観察して書く。 ○土づくりやたねまき、水まきの仕方が分かりたねまきへの見通しを持つ。 ○まくたねの数を決めてたねをまく。 ○マイペットボトルを作る。 ③～⑥	①	★		つばやき記録行動	図工	・楽しく表現する活動に取り組み、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。
	○芽が出た様子を観察する。 ○あさがおが育つ様子を見ながら、支柱立て、草とりなど、成長に応じた継続的な世話をする。 ⑦⑧	①★	②	①	発言記録行動	音楽	・楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しもうとする態度を養う。
						算数	・身近な生活場面から、ものの個数を数えたり、表したりしようとする態度を養う。 ・ものの個数を数えたり比べたりする活動を通して、数の大小や順序、数の構成について考える力を養う。
第二次(8時間)	○育ててきたあさがおが成長し、葉が増えたり、花をさかせたりすることを喜び、継続して世話をする。 ⑨⑩ ※検証(1)	②	②	②★	つばやき記録行動	道徳	・「うまれたてのいのち」の教材で、あさがおの芽が出たことを取り上げて想起させ、すべての生命あるものを大切にしようとする心情を育む。
	○育ててきたあさがおが成長し、きれいな花をたくさんさかせたりする事を喜び、継続して世話をする。 ⑪～⑬ ※検証(2)(3)	②	②★	②	発言記録行動	国語	・経験したことから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたい事を書くことができる。
	○自分の育てたあさがおや、身の回りの花や実を使って、いろいろな遊びを工夫し、楽しむ。 ⑭～⑯		③★	③	発言行動作品	算数	・加法の意味について理解し、それらが用いられる場合について理解する。 ・長さの比較等の活動を通して、長さや測定についての基礎的な意味を理解する。
第三次(8時間)	○春から育ててきたあさがおの観察を通して、秋の植物の変化に気付くとともに、成長を喜び、植物のつるでリースを作る。 ⑰～⑲	③	③	③★	発言行動作品	図工	・楽しく表現する活動に取り組み、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。
	○育ててきたあさがおのたねとりをして、新1年生にたねのプレゼント作りをする。 ⑳㉑		③★	③	発言記録	道徳	・「ありがとう」の教材を通して、気付かない所でお世話をしてくれている人への感謝の心を持つ。
	○身の回りの生活の中から秋を見つけ、発表し合う活動を通して、季節の変化に関心をもち、進んで秋の活動にかかわる。 ㉒～㉔	③		③★	発言記録	算数	・「かぼちゃのつる」の教材を通して、友達と仲良く活動する事の大切さを培う。 ・数のまとまりに着目し、数の比べ方や数え方を考える力を養う。
						国語	・経験したことから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたい事を書くことができる。
						音楽	・音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ることができる。

5 本時の指導 (第12時/全24時間)

(1) ねらい

五感を使ってあさがおを観察する活動を通して、あさがおの特徴、変化や成長の様子に興味・関心を持ち、これからも意欲的に観察や世話をしようと思う気持ちを持つことができる。

【学びに向かう力、人間性等】

(2) 展開

時間	学習活動、予想される児童の反応(○)	教師の支援(☆)と評価(■)	評価の方法
導入 10分	1 前時の観察を振り返って共有する。 2 あさがおクイズをする。 3 めあてを確認する あさがおの健康観察をしよう・ぱあと2 4 観察活動の視点を確認する。 ・葉が白くなったり、虫がついたりしていないか。 ・花がらをつんだり、新たな発見をしたりする。	☆児童が観察を通して気付いた事をワークシート等から拾ってクイズにし、「観察の視点」にする。 ☆観察の視点を持つことで、あさがおをもっとよく観察したいという思いを高める。 	・つばやき ・発言 
展開 25分	5 観察する ○「白くなっている所があるよ、これは虫のふんかなあ」 6 観察して気付いた事、新たな発見等を発表し合い、交流する。 ☆視点に沿って観察ができた児童 ⇒ワークシートに書く。 ☆視点に沿った観察が不十分だった児童 ⇒観察を続けた後ワークシートに書く。	☆観察の視点を確認しながら、新たな発見につながるつばやきを拾う。 ☆新たな発見があれば、みんなで共有する。 ☆花が咲いていない子へ前向きな声かけをする。 ☆ワークシートは持たず、観察後に書く事を伝える。 「自ら働きかける力」を育むための子への対応 (1)自分なりに進んで観察している子 共感する言葉をかけ、新たな気付きを発見できるように促す。 (2)うまく観察が進められず活動にとまどっている子 友達と関わらせたり、一緒に観察したりしながら、新たな気付きとなる言葉を伝え観察させる。 (3)活動が早く終わった子 やり遂げたことをほめるとともに、まだ気づいていない所はないか問いかける。	・行動 ・観察 ・ワークシート
終末 10分	7 自分のあさがおが健康かどうかを友達と伝え合う。 ○「病気にもなっていないし、花がらもとったし、大丈夫」 8 振り返り・学習のまとめをする。 毎日あさがおの健康観察をして、もっと仲良くなろう	☆視点をもって観察したことを確認させる。 ☆他教科での学習を生かしている子を称賛する。 ☆これからのあさがおの栽培意欲を高めるために、今後の世話の仕方について考えさせる。 (明日からどんな観察をした方がいいかな) (本でも調べてみようと言をかける) ■植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に着目して、観察したり世話をしたりしている。	・発言 ・観察 

Ⅳ 仮説の検証

研究仮説に基づき、カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導を通した生活科の授業が、自ら働きかける力を育む手立てとして有効であったかを検証する。検証にあたっては生活科の授業のみではなく、日頃の観察時のつばやきや発言、行動観察やワークシート等から児童の変容を見取り分析する。

1 教科横断的な視点での教育内容配列の側面からの考察

各教科等の単元の「育成を目指す資質・能力」を踏まえて、各教科等のどの単元がどのように配列されることが有効であるか、どの時期にどのように関連させるのが効果的かを考えながら児童と共に単元配列表を作成した(図7)。作成に当たっては、児童が生活科を単元配列表の中心に配置し、教師が関連する教科の単元を上下に配置する等、児童と教師の作成する部分を明確にした。単元配列表のタイトルは、毎日あさがおと関わり、親しんでお世話をしている児童から「あさがおとなかよしになろう」という提案があり、児童が作成した。また、教師は、児童が育てているあさがおの写真の時系列に掲示したり、児童が書いたあさがおの成長段階における思いや願い、気づきの付箋を紹介し共有したりすることで、生活科の学びを可視化した。



図7 生活科を軸にした単元配列表「あさがおとなかよし」

学びのつながりを考えて単元を配列し実践する事で活動が連続したプロセスとなり、興味・関心の高まりや友達との関わりを通して、自分では気づかなかった事をやってみようとなつた新たな活動に挑戦する姿や、「明日は花が咲いているかもしれない・・・」「学校へ行くのが楽しみだな」と期待し明日を待ちわびるといった生活を豊かにしていく思いにつながると考える。単元をつなげる事で様々な場面を通してあさがおとの触れ合いが生まれ、成長と共に思いや願いが膨らみ、自ら働きかける気持ちを継続させることができたと思える。児童の思考の枠組みには、「これは生活科」「これは国語科」といった仕切りはなく、一つ一つの体験や学びが日常的に絡み合っていく事で学校生活が豊かになっていくと考える。活動が連続する事で発達段階に応じた満足感や達成感を味わう事ができ、それが意欲や自信となっていくと推察する。検証授業後、本校職員間でも生活科と他教科等との関連を俯瞰できる単元配列表の良さが話題に挙がった。実践を通して振り返り・改善を行いながら、次年度は低学年部や教務を交えて、生活科を軸にしたカリキュラムを作成する必要があると感じた。

2 合科的・関連的な指導からの考察

(1) 合科的な指導の視点

図工の「クレヨンやパスとなかよし」の単元では、クレヨンやポンキープンシルを使って、観察したあさがおの色塗りや葉のこすり出しを楽しんだり、「ひらめきコーナー」の単元では、あさがおの水やりに使用するペットボトルに絵を描いたりシールを貼ったりしてマイじょうろを製作することで(図8)、あさがおに対する愛着も深まったと推察する。音楽の学習でも、「ひらいたひらいた」に出てくる花の名前をあさがおに変え、音楽の時間のみならず、色々な場面で歌ったり踊ったりして級友と一緒にあさがおの成長を楽しむ姿が見られた。



図8 マイじょうろの製作

道徳「うまれたてのいのち」の教材においては、動植物の赤ちゃんの生き生きとした命を感じるとともに、自分自身が元気でいられることを喜び、すべての生命あるものを大切にしようとする心情を育むことをねらいとした授業を行った。授業の導入で大きくなったら松の木になることを押さえ、その赤ちゃんである「松の芽」の様子を捉える場面があったが、あさがおの芽が出た時の様子や気持ちを想起する事で命の尊さに触れ、「命ってすごい」と感じる事ができた。

(2) 関連的な指導の視点

検証②では、児童の発見やつぶやきをクイズにし、気付かなかった事や新たな発見を共有した後観察する視点を確認して自分のあさがおを観察した。ワークシートに記録しながら観察をしたため、観察⇒気付き・発見⇒友達との共有⇒ワークシートへの記入と、ひらがなを学習し終えたばかりの1年生には大変な活動量となり、書く時間が十分にとれないという課題が残った。その課題を踏まえ、生活科と国語科を続けて行う事にした(図9)。生活科でじっ

	月	火	水	木	金
1		算			
2		生			生
3		国	生		国
4			国		

図9 生活科と他教科をつないだ時間割

くり・たっぷり観察を行った後、次の国語科「よくみてかこう」の単元で、観察して気付いたことや発見した事を文や絵に表現する事が満足感・達成感を得る事ができた。観察後の児童のワークシートを見ると、12人中10人の児童が国語科で学習した「様子を表す言葉(ざらざら、ちくちく等)」を活用していた(図10)。体験で獲得した情報を絵作文に書き表すなど言語化することで、あさがおへの気づきだけでなく、学びの入門期として書き言葉の獲得や語彙数の増加にも寄与したと考える。ほかに、たし算の学習を活かして咲いている花の数を数える児童や(図11)、つるの長さを友達と比べる児童、あさがおの葉っぱを使って数の合成分解「いくつといくつ」の学習の習熟を図る児童もおり、観察時の発見・気付きの記録を算数に活用する児童が12人中8人いた。各教科の資質・能力を把握し、合科的・関連的に扱うことによる体験活動と表現活動をつないだカリキュラムは、次の学習への学びに向かう力に結びついたと考える。

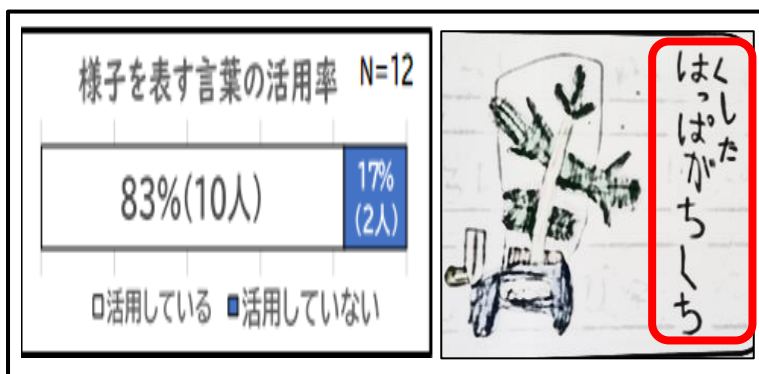


図10 様子を表す言葉の活用率と児童のワークシート

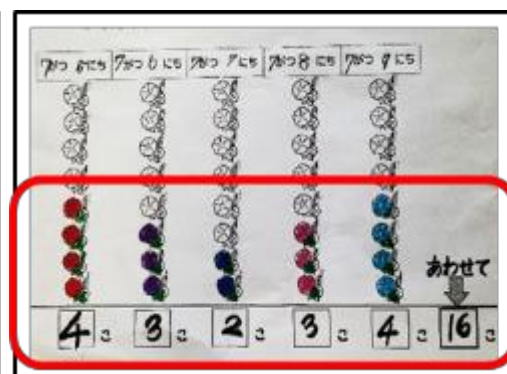


図11 花の数のたし算表

検証③では、生活科の授業で観察(体験活動)をした後、次の国語の授業で観察したこと伝え合う交流場面(表現活動)を設定した。一人の児童が発見した事を伝えたと「あった、あった。」「ぼくのにもあったよ。」「えーあったかな。」と、共感したり振り返ったりする場面が見られた。観察を通して発見した事を共有し合う事で自身の活動を振り返り、「ぼくのにもあったぞ、確かめてみよう」「気づかなかったな、今度よく見てみよう」等、次々と活動への意欲・期待が生まれ、新たな発見と出会い、さらに「これは何だろう」「知っている人に聞いてみよう」と活動や学びが広がっていった。他者と関わり合う場を位置付けたことで、新しい価値を獲得したり、自分の学びを振り返り再確認したりするような深い学びにつながったと考える。

このように、合科的・関連的な指導を通し、体験活動と表現活動を豊かに行き交わせながら児童の思いや願いを実現していく事は(図12)、次の追究を生み出し自ら働きかける力を高める手立てとして有効であったと考える。さらに、合科的・関連的に扱う事で各教科の特性がはっきりし、学習内容が重なる事なく時間的にも効率よく進める事ができた。

3 自ら働きかける力が育まれたかの考察

観察当初は、お水をあげる・声をかける等、教師に指示されて活動していたが、「大きくなるように日当たりのいい場所に置こう」等そらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、自ら

働きかけるようになった。成長と共に葉が多くなってくると「可哀想だから踏まれないようにしてあげよう」とみんなで話し合い、支柱を立ててあげた。また、働きかける中で「友達のと違うぞ」と変化や成長の様子を比べたり、「多分そうかな」と見通しを立てたり、「どうしてほしいのかな」とあさがおの立場に立って考えたりする等、自分たちでお世話の仕方を考え工夫するようになってきた。また、つるが伸び花が咲き始めると、下の方の葉が茶色くなっているのが目立ってきた。それを見た児童の一人が「どうして茶色くなっているのかな、大丈夫かな。」とつぶやくと、周りで観察していた児童も気になって自分のあさがおを観察し始めた。そこで、検証②で、あさがおの健康観察をする授業を行った。体験・交流を通して、あさがおが健康か病気かを確認する方法を知り、その後のお世話で枯れている葉をとったり虫がついていないか確認したりするようになった。日々のお世話や観察を通して「自分のあさがお」という意識が高まり、より深く関わる事で質の高い気づきが生まれ、休日にも学校へきてお世話をする(図13)等、自ら働きかける力が育まれていったと考える。

初めて一人で栽培活動に取り組んだ児童Nは種まきの際、自分の種に「おともだちなてね」と話し、芽が出たあさがおに「出てきてくれてありがとう」とつぶやいていた。観察時には「花は何色かな、なかよくなるうね」等と声をかけ、からまってとれてしまった葉っぱに「水をあげないと」と、水飲み場へ行き水に浸す等、愛情いっぱいにお世話をしていた。登校後はいつもあさがおの成長の喜びを友達や教師に伝える等、日々自ら観察している様子が「息が聴こえるよ」「葉っぱの後ろが白くなっている」等のワークシートからも感じられた。検証③の「あさがおの健康観察をしようパート2」で新たな発見を伝え合い共有している時(表1)、別の児童の発見に興味を示し、自分のあさがおを確かめに行く児童Nの姿があった。休み時間、児童Nは教室にあった図鑑で、話題に挙がっていたものがおしべであることを確かめ、ワークシートに記述していた(図14)。気づきを共有した事で興味・関心が高まり、「自分のあさがおにもあるかな」という思いが、児童Nの観察を深める行動につながったと考えられる。またある日曜日、台風対策のため学校に行くと、「毎日お世話をしているあさがおが気になるみたいです。あさがおを見に行こうというので一緒にきました」と児童Mが母親と一緒にやってきた。児童Mは、あさがおを教室に入れる等、自分なりの方法で自分と友達のあさがおを台風から守っていた。この経験は児童Mに自信と喜びをもたらし、その後の栽培活動でも葉っぱが病気になっていないか観察したり、虫がついていた



図12 自ら働きかける力の高まりのイメージ図

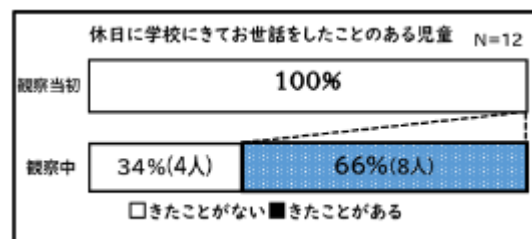


図13 休日に学校へきてお世話をする児童

表1 「新たな発見」の共有場面

T:他に新しい発見があった人?
 S1:朝顔のかれているものを見たら、何か白いものがあった。
 S2:何かビッてなっているのがあるよ。
 S3:そう、そう。
 S1:白い髪みたいの。
 T:ほそいの?
 S4:めっちゃほそい。
 N男:あ〜(手を叩いて) 白いのがあったー。
 S5:もやしまいたったよ。

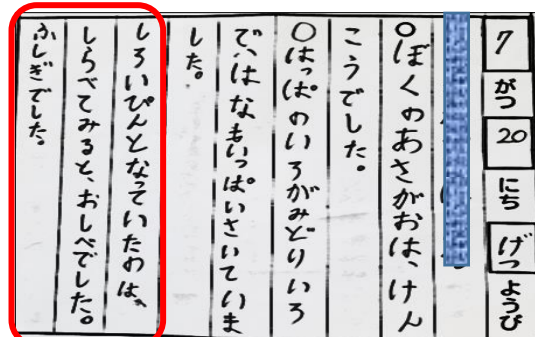


図14 児童Nのワークシート

ら取ったりする等、お世話の仕方にも変化が見られた。このように活動を繰り返す中であさがおへの愛着が生まれ、さらに自己決定し行動する経験の積み重ねが、自ら働きかける力を培うことに繋がったと分析する。

4 生活科の授業の工夫からの考察

栽培活動は長期にわたる活動となるため、学習意欲を継続させる工夫が必要である。児童に「自ら働きかける力」を育むため、自身の課題であった教師の適切な関与と、自己選択・自己決定の場を明確にした。これまでは教師が次の活動を計画し、必要なものを与え活動させる事が多かったが、児童が思いや願いを実現するため意図を持って働きかける事ができるようにした。具体的には、育てる種を選び、鉢のどこに何個まくか、観察するために鉢をどこに置けば良いか等、各自の思いや願いに沿って選べた。さらに、「自ら働きかける力」を高めるための環境を設定した。観察グッズを常に準備しいつでも活用できるような場所に置いたり、あさがおの成長の様子がイメージできる本や写真を掲示したり、授業の初めにクイズを取り入れたりする事で常にあさがおを身近に感じ教科を横断した学びを高める事ができた。授業始めのクイズは、観察を通した学びの中から教師が抽出して作成し、観察を深める視点として活用した。また、観察を深める手立てとして「五感カード」(図 15)を活用した。見る・聴く・さわる・匂いをかぐ・感じるの 5 つの視点を意識して観察する事で成長や変化の様子をより深く感じ、観察の視点を揃える事で友達のあさがおと比較する事ができた。児童のワークシートを見ると、検証①の自由記述では気づきや発見が 1～3 個しか書けていなかったが、検証②の五感の視点に沿った記述では 12 名中 7 名の記述に、気づき・発見が 4～5 個確認できた(図 16)。気づきの質の高まりがより深い観察となり、学びの意欲を育むことに繋がったと考える(図 17)。



図 15 五感カード

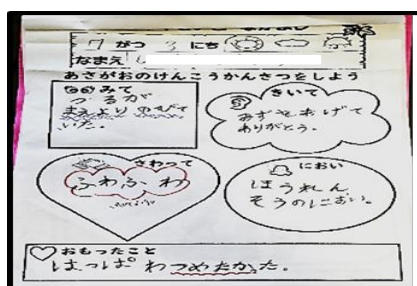


図 16 五感を通した観察後のワークシート

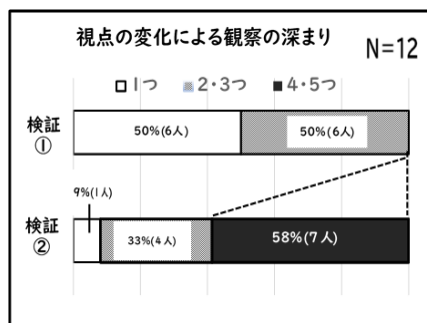


図 17 視点の変化による観察の深まり

以上の事から、カリキュラム・マネジメントの視点に立った合科的・関連的な指導を取り入れた生活科の授業の工夫は、自ら学ぶ楽しさ、満足感、達成感を味わう事に繋がり「自ら働きかける力」を育む事ができたと考察する。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 学びのつながりを考えて単元を配列し可視化した事で、活動が連続したプロセスとなり、満足感や達成感を味わう事で得られた意欲や自信が、自ら働きかける力の継続につながった。
- (2) 合科的・関連的な指導を取り入れ、体験活動と表現活動を相互に関連させた実践をする事で、学びの自覚を促し、自ら働きかける力を高める事に繋がった。
- (3) 自己選択・自己決定の場の明確化、生活科の授業を通した環境作りによって気づきの質が高まり、学びに向かう意欲を育む事ができた。

2 課題

- (1) 児童の実態・各教科等の進度に応じて単元配列表の振り返りや改善を行うと共に、低学年部や教務を交えて、生活科を軸にした単元配列表を作成し、各教科等との関連を図る。
- (2) 各教科等の特性を活かした合科的・関連的な授業を通して、児童のつぶやき・発見等しっかりと拾い、学びの共有を図りながら興味・関心を高めていく。

〈参考文献〉

- 沖縄県立総合教育センター 2020 『ハンドブック「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」』
- 田村学 2017 『生活・総合「深い学び」のカリキュラム・デザイン』 東洋館出版社
- 田村学 2017 『カリキュラム・マネジメント入門』 東洋館出版社
- 田村学 2017 『生活・総合「深い学び」のカリキュラム・デザイン』 東洋館出版社
- 久野弘幸 2017 『小学校 新学習指導要領ポイント総整理 生活』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 生活編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 国語編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 算数編』 日本文教出版
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 音楽編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 図画工作編』 日本文教出版
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説 特別の教科 道徳編』 廣済堂あかつき
- 田村学 2012 『小学校生活 イラストで見る 全単元・全時間の授業のすべて』 東洋館出版社
- 国立教育政策研究所 2020 『評価規準の作成 評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校生活】』 教育出版

〈参考 WEB サイト〉

- 植物の成長に関心をもってはたらきかける、栽培単元の工夫・生き生きウィークル
<https://www.nichibun-seikatsu.net/case-study20190717/>（最終閲覧 2020 年 7 月）
- 生活科を中核に据えた小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメントの在り方
<https://www.google.co.jp/search?source=hp&ei=Q3A8X9boMquKr7wPmeODoA0&q~>（最終閲覧 2020 年 6 月）
- 沖縄県立総合教育センター 福地音馨（平成 25 年度）「気付きの質を高め、思考力・表現力を育む指導の工夫」
<http://www.edu-c.open.ed.jp/>（最終閲覧 2020 年 8 月）
- 沖縄県立総合教育センター 儀保由喜子（平成 29 年度）「学びに向かう力を育む生活科指導」
<http://www.edu-c.open.ed.jp/>（最終閲覧 2020 年 8 月）